

人類の進化と『神との対話』についての一考察

Human Evolution and a Study of Conversations with God

岡本 由実子

OKAMOTO Yumiko

Abstract: Scientific advancement has brought human beings material wealth. However, it can be said that the rapid speed of scientific advancement has left us spiritually lagging. Essentially the two should be advanced and integrated together. The 21st century may just be the era of regaining the correct balance of “mind” and “matter”. In order to solve the issues which modern humans are faced with, such as environmental destruction, resource depletion and food shortage, it must be pointed out that we must now rethink each individual's life style as something each individual can participate in solving such global issues. What is suggested here is to reconsider the previous “material-oriented” lifestyle and shift towards a lifestyle with a good balance of “mind” and “matter” - a suitable lifestyle for the 21st century. It is an important yet hard decision to make for humans who live in the 21st century. Such difficult choices lie ahead of us, and we must address what answers spirituality and science can offer?

Keywords: the 21st century, lifestyle, “mind” and “matter”, God, genomics,
21世紀、生活様式、「心」と「物」、神、遺伝子学

1. はじめに

東京大学名誉教授・伊東俊太郎は、著書『比較文明』の中で、以下のように述べている。

人類がこれまで経験してきた巨大な文明史的転換期とは、人類革命（人類の化成）、農業革命（農耕の発見）、都市革命（都市の形成）、精神革命（哲学や普遍宗教の誕生）、科学革命（近代科学の成立）の五つである。そして現在は、五番目の『科学革命』が一つの袋小路に入って新しい文明の形態が模索されている六番目の大きな転換期だろうとおもう。

さらに、現代とはまさしく「人間の精神的価値をもう一度反芻して、科学技術のあり方と人間の本当の生きがいとの関係を考え直さなければならない段階」²であると述べ、「精神革命」と「科学革命」を統合するものを「人間革命」と呼び、その実現が現代を生きる我々の課題だとしている³。

我々は便利さや生活しやすさといった外面的な繁栄や経済的な豊かさと引き換えに、精神的な豊かさを失いつつある。「科学革命」のすさまじいスピードは、本来ともに進歩し、統合されるべき“文化”つまり精神性を置き去りにしてしまった。伊東が述べるように、「人間革命」の時代とは、人間の心のあり方を見直し、精神と科学の関係を考え直す段階であるといえるのではないだろうか。

また、フランスの生理学者・ルコント・デュ・ヌイは、著書『人間の運命』において、人間の進化は、ようやく「良心の発展の一段階」⁴に達したにすぎないとして、次のように述べている。

人間は機械による変化を環境の中に取り入れ、みずからをそれに適応させてきたが、その変化が進歩を意味するか破滅を意味するかは、人間の道徳的態度に、環境をともなう改善が見られるかどうかにかかっているのである。⁵

また、「文明の真の目的は、物理的な努力を軽減するような、珍妙な機械を考え出すことではなく、あらゆる方法で人間の自己改善を助けることであるべき」⁶であるとも述べている。その「珍妙な機械」が我々にとって進歩となるか破滅となるかを、判断しうよう、知性と良心のバランスを保たなければならない、ということであろう。これは伊東の定義する、人間の心のあり方を見直し、精神と科学の関係を考え直すべき「人間革命」という段階と合致しているといえるのではないだろうか。

デュ・ヌイも伊東も、今日の科学のあり方、現代人の心のあり方に警鐘を鳴らしている。そして、人間の心のあり方を見直し、知性と良心のバランスを保った暮らしこそが、21世紀にふさわしい生活様式といえるのではないだろうか。

2. 「持続可能な生活様式」と「持続不可能な生活様式」

近代以降発達した科学技術は、人類に物質の豊かさをもたらしたが、同時に環境破壊や地球資源の枯渇をまねき、国・地域間に、経済や技術の発展における格差を生み出した。そのような、今日の地球の状態について、東京学芸大学教授・佐野寛は、その著書『21世紀的生活』において、以下のように述べている。

オゾンホール、熱帯雨林の破壊、海洋汚染、大気汚染、酸性雨、絶滅に瀕した動物たち……、地球はまるで、癌に侵されてしまったかのようだ。

いうまでもなく、われわれ人間がその癌細胞であり、同時に発癌物質なのである。⁷

あらゆる生命が、連鎖し関連しながら生きている地球上においては、人間という生命が癌化しはじめると、他の生命にも影響を及ぼすということを示している。そして、癌細胞が増殖した結果が、今日の状態であるという。佐野は、近代において、科学や産業の発展がもたらした変化について、以下のように述べている。

変化というものは、たいていプラスとマイナスの両面をともなっているが、「近代的発展」も例外ではなかった。われわれ人間は、そのプラス面だけを享受し、マイナス面を自然の浄化力などに委ねてきたのだが、人間活動が作り出すマイナスの量があまりに拡大しすぎたために、かつては無限に思えた自然の浄化力等の限界が見えはじめ、このまま行けば、二十一世紀の半ばにはその限界に達して、すべてが、絶対的に「オシマイ」になる、ということがはっきりしたのである。⁸

そして、近代における発展がもたらしたプラスとマイナスの例として、「車は、乗る人に大きな便益を与えるが、道を歩く人には脅威を与え、その排気ガスは、酸性雨や炭酸ガスによる地球温暖化現象を発生させる」⁹ことや、「高速道路は遠く離れた場所を近づけるが、道の向こう側のような近い場所を遠く隔てる」¹⁰ことなどをあげ、以下のように述べている。

そのマイナスの総量が、経済発展の大規模化に比例して驚くべき拡大を続け、「持続可能な発展」の限界を逸脱して地球生命圏のバランスを崩し、危機的狀態に陥れるに至ったのである。¹¹

佐野の言う「持続可能な発展」とは、人間が何をして、自然の浄化力が勝り、地球という生命体が難なく生き続けることのできる程度の発展であるといえるだろう。しかし近代以降の発展は、自然の浄化力より人間の力が勝ってしまい、資源枯渇や環境破壊といった現象を招き、地球の生命を脅かす、「持続不可能な発展」であるということになる。

佐野は、それぞれの発展を反映した生活様式を「持続可能な生活様式」「持続不可能な生活様式」と呼ぶ。「持続不可能な発展」を続け、「持続不可能な生活様式」を続けてきた近代以降の人間が癌細胞だというわけである。そして、その癌細胞が、さらに増殖し、地球全体に広がるようとしていることを指摘している。

もしも中国 13 億人とインド 9 億人に東南アジアの数億人、合わせて 24~5 億人が、いっせいにアメリカ人や日本人のような生活を始めれば、食糧生産の面でも、環境破壊の面でも恐ろしいことになるだろう。

だがもちろん「われわれは今までどおり大量エネルギー消費文明を続けていくから、君たちも今までのままでいてくれ」などと言えるはずもない。

ではどうする。答えは単純かつ明快なのだ。まずわれわれが、これまでのような「持続不可能な生活」を「持続可能な生活」に転換すること。そして中国やインド東南アジアの人々が、そちらのほうをキャッチアップすべき目標にしてくれること。それしかない。¹²

近代以降の発展の恩恵を受けてきたのは、日本やアメリカなど一握りの先進国に過ぎず、まだ恩恵を受けていない国々が発展の恩恵として、日本やアメリカのような「持続不可能な生活様式」をはじめたとしたら、地球という生命体は、確実に「オシマイ」となるだろうと佐野は警告している。自然や資源は、「持続不可能な生活様式」を支え続けるほど、寛大でも無限でもなかったのだ。

このような危機的状況を回避するためには、生活様式の変更は避けがたいことだとして、佐野は次のように提言する。

もし人間が地球生命圏の滅亡を回避したいのであれば、すべてを「持続可能な発展」の方向に展開させる必要がある。未来はその方向にだけ開けている。われわれは皆、何としてでもその方向に向かうべきなのだ。そしてその時、新しい「世界感覚」になるのは、「持続可能な発展が造り出す世界を、事物を、物事を、「美しい」と思い、「いいなあ」と感じる感覚なのである。¹³

つまり、これから人間が転換していくべき「持続可能な発展」及び「持続可能な生活様式」とは、「持続不可能な発展」「持続不可能な生活様式」という経験を踏まえ、「新しい『世界感覚』」に基づいた、21世紀にふさわしい発展であり、生活様式であるといえるのではないだろうか。

しかし、科学技術の進歩を享受し、物質的豊かさ、簡易さ、便利さに慣れてしまった人類が、今日の「持続不可能な生活様式」を「持続可能な生活様式」に切り替えることは容易なことではないだろう。

3. 江戸時代の生活様式

佐野は、日本における「持続可能な生活様式」の実例として、江戸時代のリサイクルシステムをあげている。

江戸時代の生活様式は、ほとんど完璧な「持続可能な様式」であり、宮殿、邸宅、長屋などの建築物から家具什器、日用品にいたるまで、すべてに明快なデザイン原則が用意されていた。¹⁴

同様に、日本大学工学部教授・高橋英之も著書『偉大なる衰退』の中で、江戸時代はまさに、「省資源・リサイクルの環境調和型社会」¹⁵であったとしている。もともと日本には、消費削減（リデュース）再使用（リユース）資源再利用（リサイクル）修理（リペア）というシステムが社会にしっかりと根付いていたのである。佐野は「もったいない」という言葉を、「まさに環境コストについての本能的な感覚を、自覚的な言葉にしたもの」¹⁶と定義している。日本人は、今日的な環境問題に直面する前から、本能的にエコロジカルな生活倫理を持っていたといえるのではないだろうか。

ところが現代社会では、使い古しより新品がよい、修理が手間だ、あげくに、単に所有欲にかられてローンを組んでまで次から次へと様々なものを買って求めていく。そして、飽きた、ちょっと汚れた、時代遅れだといったは、それらをどんどん捨てていく。こうして我々の生活からゴミがあふれだす。このような暮らし方が、いつまでも続くわけがない。「もったいない」という生活倫理の回復が、これからの生活様式の大変な基盤となるだろう。そこから、一人一人が社会のために生きるということが始まるのではないだろうか。

佐野は、江戸時代の生活様式について、以下のように述べている。

その、全ての職人に共有されていたデザイン原則は、封建制度の価値観・美意識と一体化しており、その世界観とも分かちがたくつながっていた。

そして明治期、欧米文化が、まったく異質な世界観・価値観・美意識を伴って人々の前に出現したとき、人々、とくに若い人たちはまばゆく輝く欧米文化に憧れ、自分たちの江戸文化を卑下したのだ。卑下して、モリス等、西欧の文化人たちを感動させたすばらしい文化を捨て、その世界観・価値観・美意識をランダムに欧米文化のそれに取り替えていった。¹⁷

やがて工業化・情報化の波が大量生産・大量消費のシステムを生み出し、そのようなシステムに自らの生活様式を適応させてきた私たちの生活様式は、もはや「持続不可能な生活様式」である。先述のように、飽食を続け、環境を破壊し続ける現在の生活様式が、このまま持続できるわけもない。しかもこのような日本やアメリカなどの先進諸国の生活様式が、中国やインド、東南アジア諸国に広がろうとしており、21世紀にふさわしい「持続可能な生活様式」への転換が求められている。

しかし、いくら江戸時代が環境調和型の素晴らしい社会であったとしても、現代的な生活様式を全て捨て、江戸時代の暮らしに回帰することなど考えることはできない。また、江戸時代の環境調和型社会は、封建的な反民主主義に支えられていたことを、高橋は指摘している。

徳川のエコロジー社会は、反民主主義社会で民衆の自由を厳しく抑圧したがゆえにはじめて成立しえたのではないか。これが個人の自由、したがって生産と消費の無制限な自由

を旨とする民主主義社会であれば、エコロジー社会など原理的に成り立ちえなかったのではないか。この疑問が当たっているなら、民主主義を捨てる意思がない限り、江戸時代は参考資料にはならないことになる。反民主主義だからエコロジーでありえた、それだけのことなのだから。¹⁸

現代を生きる日本人には、もはや民主主義を捨てることはできない。となれば、21世紀にふさわしい「持続可能な生活様式」を我々が創造していくほかはないのではないだろうか。

4. モノ作りの変容とデザインの功罪

近代以降の工業化・情報化の波が生み出した大量生産・大量消費のシステムは、それまでの、よいものを作ればお客がついてくるというモノ作りの基本姿勢を、覆してしまったといえるだろう。企業は大量生産・大量消費を促進しつづける。新しい商品がいきわたっても、量産競争は終わらない。この果てしない競争に勝つためには、商品を早く陳腐化させて、次なる新製品に乗り換えさせなければならない。綿密な市場調査のもと、消費者のニーズをつかんだ新しい商品が、次々に売り出される。このようにして、商品のライフサイクルが極端に短くなるという状態に陥った。そこにはモノ作りの価値観ではなく、企業の思惑が暗躍していることを、佐野は指摘している。

目覚ましい進化を遂げた生産力＝複製力が市場調査の指示どおりに量産する商品や建物やメディアの表面を構成するイメージの群れが、人間の環境そのものとなって人間の生活を取り囲み、人間の心の内面にまで浸透して、人間性のありようをつくりあげていく、ということが始まった。¹⁹

消費者は、知らぬ間に企業の思惑に丸め込まれ、広告に踊らされて、熱病のように新しいものに飛びついていった。「修理するより買い換えたほうがお得ですよ」という言葉に、簡単に乗ってしまうようになった。モノに対する愛着がなくなり、「もったいない」感覚を失っていったのだ。

しかし「消費者」はメディアが作り上げた存在であり、メディアが「もったいない」という感性を評価しはじめれば、「消費者」は、案外早く、生活者という「生身の人間」に戻っていくはずだ。そして生活者は「もったいないモノ」を「もったいない」と思うようになるだろう。²⁰

消費社会は、我々の心のありようまで変えていったといえるだろう。

佐野によれば、このような消費社会において、デザインの果たした役割と責任は大きい。何

故なら、我々を「持続不可能な生活様式」に誘い、「もったいない」という感覚を失わせた罪の片棒を担いできたからである。デザイナーは、自分自身の価値観ではなく、企業の思惑に迎合した。永く愛用したくなるデザインではなく、大量生産・大量消費システムを支える、愛着のわからないデザイン、すぐに買い換えたくなるデザインを生み出し、溢れさせた、と佐野は主張している。²¹

21世紀にふさわしい「持続可能な生活様式」に切り替えていくためにも、モノだけでなく、消費者の心のあり方をもデザインし、方向付けて行くことが、これからのデザインの現場に求められていくのではないだろうか。

5. 21世紀にふさわしい「持続可能な生活様式」への試み

このようなデザイン活動は、すでに始まっている。紙商社である株式会社竹尾により、100周年事業の一環として「リ・デザイン展」が計画された。そこに出品された、紙皿、コピードリッパー、ゴキブリホイホイ、出入国スタンプ、切手・消印などの、日常の紙製品には、持続可能な生活様式に我々を誘う、素晴らしいデザインがあふれている。企画者・原研哉は、次のように述べている。

生活を創造する知性やイマジネーションに言及する「デザイン」という概念は100年も前に社会の中に産み落とされたはずなのだが、二十世紀、特にその後半の五十年間は、デザインは経済と密着しすぎていて、その姿を生活の中にはっきりと見定めることが用意ではなかった。そういう意味では、概念として誕生しながらも、それは母体の出口で停滞し、社会の中へと完全に生まれきっていなかったと言えるかもしれない。

この展覧会では、はっきりとデザインという概念の意味するものの姿を描いてみたかった。²²

自然と愛着がわき、大切に永く使いたくなるようなデザイン。使うのが楽しくなるデザイン。そしてデザイナー自身が楽しんでデザインするというのも大切であろう。大量生産・大量消費のためではなく、デザイナー自身がよいと思う、デザイナーの美意識や価値観に支えられたデザインが、本来のデザインであるといえるのではないだろうか。原が指摘するように、これまでのデザインは、経済に密着しすぎていた。暮らしの中のデザインとは、本来このように、暮らしに密着したものでなければならぬのではないだろうか。

「リ・デザイン展」に出品された作品を見てみよう。

坂茂がデザインした四角い紙管のトイレトーパー²³は、本当に素晴らしい。丸いトイレトーパーは、少し引っ張るだけでスルスルと紙が出てくるので、ついつい必要以上の長さを使ってしまう。しかし、四角い紙管に紙を巻けば外形も四角くなり、引き出すときにカタカタと抵抗が加わり、紙は出にくくなり、必要以上の使用が避けられ、省資源につながる。また、

丸い形ゆえに発生していた梱包の隙間が輸送量の無駄になっていたが、四角くなれば、隙間なく梱包できるので多くの量が輸送でき、コストの削減にもつながる。しかも、四角いトイレットペーパーは美しい。

平野敬子がデザインしたCDジャケットやビデオカセット、四六上製本又は辞書などサイズの、書齋やオフィスに馴染みやすい、縦長の長方形の姿をしたティッシュペーパー²⁴も素晴らしい。ティッシュペーパーの一番の特徴は、「次のティッシュが半分でかかっている形状で安定しているということ」²⁵なのだが、その取り出しやすさゆえについ使いすぎてしまう。そしてその特徴ある形状が、空間に馴染みにくいという欠点ともなっている。この2点を解消する平野氏のティッシュペーパーは、まるで本やファイルのように異物感がなく、空間に同化する。もちろん、次のティッシュの出かかり具合も控えめだ。

しかし、このようなデザインを商品化することはむずかしいであろう。佐野は以下のように述べている。

人類の経験のすべてに学びつつ、あるべき未来のビジョンを描き、考え、その実現に向かって、強い信念をもって臨むことが必要なのだ。なぜならそのとき、エコノミーとエコロジーの葛藤が必ずついてまわるからである。今日のエコノミーが明日のエコロジーを破壊する傾向が、経済にはある。その傾向に逆らうことは容易ではない。強い信念がなければ、あるべき未来のカタチは実現できない。²⁶

使われてこそ儲かるトイレットペーパーやティッシュペーパーを使いにくくし、消費量を押さえようとするのだから、このようなデザインは、簡単には商品化されないだろう。まさしく、「エコノミーとエコロジーの葛藤」である。

しかし、「リ・デザイン展」にみられるように、このことに気づき、エコノミーよりエコロジーを優先する企業が増え始めている。消費者も、四角いトイレットペーパーを選びうる価値観や美意識を育み、広告や情報に流されず、何が大切なのかを考えて選択するという主体性を回復することが必要となってくるであろう。

ところが、何が本当に大切なのかということはわかっているとしても、それを実行に移すことは難しい。自動車を使わず歩くこと、クーラーの温度設定を1上げることに、スーパーのレジ袋を使わないことなど、どれをとっても、簡単でありながら、なかなか実行できないという人は多いのではないだろうか。「私一人だけが実行しても仕方ないのではないか」あるいは「私一人くらい実行しなくても大丈夫なのではないか」といった気持ちを、誰もが抱くことだろう。

しかし、これまで見てきたように、地球の危機的状態を脱するためには、一人でも多くの人々が「持続可能な生活様式」に転換していかなければならない。人間は、社会のため、地球のため、という利他的な目的のために、楽をしたい、快適でありたいという利己的な欲求を抑えることができるのだろうか。

次に、この疑問について、遺伝子学者・村上和雄の著書を元に、遺伝子という側面から考えてみる。

6. 遺伝子レベルでみる人間の可能性

遺伝子といえば、いわゆる「遺伝」によって生命の形質や特徴を情報として次世代に伝達するはたらきや、アミノ酸の並び方を規定し、どんなタンパク質をつくるかの指令を出すことで、生命の全ての営みを正常に保ち、細胞を複製再生産してリフレッシュしていくはたらきなどが知られている。村上和雄は、これらのはたらきに加えて、「私たちがみんなもっているのに、その大半を眠らせているさまざまな可能性のみなもと」²⁷であるとしている。そして、人間の可能性について、以下のように述べている。

人間の能力はあらかじめ遺伝子に書かれてあり、それ以外のことはできない。たしかに人間の可能性を信じている人にはショックなこともかもしれません。

ただ、人間の遺伝子で現在はたらいっているといわれているのは5%から、せいぜい10%で、あとはまったく眠ったままの状態におかれています。つまり細胞の中の遺伝子は、A、T、C、G からなる 30 億の膨大な遺伝情報をもちながら、そのほとんどは OFF の状態にあるということです。

したがって有限といっても、それは私たちの頭で考える有限の枠とは次元が違う。まずどのようなことでも可能性はある。無限と思っても何のさしつかえありません。²⁸

その限界を意識する必要もないほど、遺伝子に書かれた情報は膨大で、人間の想像できる次元を超えており、したがって、こうありたいという望みは、ほぼ実現するだけの可能性をもっているということである。

遺伝子は様々な能力を秘めているが、その大半が眠っていて OFF の状態になっているのだという。しかし、村上は、以下のように述べている。

眠っていた遺伝子を ON にすることで潜在能力を目覚めさせ、それまでできなかったこともできるようにし、とても自分には無理と思えたことも可能になる。そういう可能性の発現に遺伝子は大いに関与しているのです。²⁹

眠っている遺伝子のスイッチを ON に切り替えれば、さまざまな能力が目覚め、可能性が広がっていくという。しかも、「遺伝子の ON / OFF のスイッチ機能は生まれつき固定のものではなく、さまざまな環境の変化によって『人為的』、かつ後天的に、作動させたり切り替えることができる」³⁰ののだとも述べている。

では、どのようにすれば、遺伝子のスイッチを ON に切り替えることができるのだろうか。

村上は、物理的要因(熱、圧力、張力、訓練、運動など)食物と科学的要因(アルコール、喫煙、環境ホルモンなど)精神的要因(ショック、興奮、感動、愛情、喜び、うらみ、信条、信仰など)を挙げ³¹、特に精神的要因の重要性を強調している。「明るくのびのび、小さなことにくよくよこだわらない姿勢が、よい遺伝子をONにして、幸福や健康につながっていくことはほぼ疑いのないこと」³²であるとして、心の張りや生きがいを持ち、明るく前向きにプラス思考で生きること、感動する心、感謝する心、人との出会いを大切にすることなどを挙げている。

村上はさらに、「自分の名誉や利益のためではなく、『人のため、公のため』という他を利する姿勢をもつこと。利他的な態度や生き方が遺伝子ONに通じる」³³と述べ、人のため、社会のために生きるという利他的な姿勢も、遺伝子ONにつながるとしている。

もともと人間は共生的環境のなかで生きてきました。現在の競争的環境などは近代以後の、この2~300年のことにすぎません。ですから人間の本来は、他を蹴落とす競争よりも自他ともに利する共生に向いているのです。利己をOFFし、利他をONする生き方。これはけっしてきれいごとでも無理な背伸びでもなく、人間にとって遺伝子に刻まれた自然な行為といえます。³⁴

利他的な姿勢が遺伝子ONにつながるのは、それが人間の本質に合致するからだという。例えば、事故や災害に出くわしたとき、とっさに、身の危険も顧みず、助けようと行動することは、本能的な反応であり、人間が本来もっている利他的な本能が働いた結果だとしている。人間が本質的に利他的であるとすれば、「持続可能な生活様式」に転換していくことは、本能に即した選択であるということができよう。

しかし、楽をしたい、快適でありたいという利己的な欲求があることも事実である。人間は、利己的な存在なのだろうか、それとも利他的なのだろうか。

7. 利己と利他の共存

人間の能力が、遺伝情報の範疇に限られているのなら、遺伝子が利己的なのか利他的なのか、を考えることは、重要な視点であるといえよう。

遺伝子のはたらきの上で、個体の維持や繁殖などは、利己的なはたらきであるといえるだろう。これに対して村上は、「アポトーシス」と呼ばれる現象をもって、利他的なはたらきを紹介している。

アポトーシスとは、細胞の自殺の意味で、遺伝子には次々に細胞を生み出すための情報だけでなく、反対に、不要になった細胞を「死に追い込む」ための情報もプログラムされているのです。

セミのような変態をする生物では、さなぎになる前と後、あるいは幼虫と成虫とでは外見だけでなく、器官のはたらきまでまったく異なってしまう場合があります。たとえば幼虫のときに桑の葉っぱを食べて糸を吐き出すカイコは、さなぎになった時点ですでに、幼虫時代の消化管や繭糸を吐き出す蚕糸管などが跡形もなくなっていることが確かめられています。

成長につれて不要になった組織や器官の細胞がみずからこわれる、つまり自殺するからです。³⁵

つまり、個体が正常に成長していくため、役割を終えて不要になった部分がなくなるよう遺伝子にプログラムされたものが「アポトーシス」である。個体の生存という全体的な目的のために、自らが死んで犠牲になることで、他の細胞を生かそうとする、利他的なはたらきであるといえるのではないだろうか。

村上教授とは反対に、遺伝子の利己的な側面に注目したリチャード・ドーキンスは著書『利己的な遺伝子』の中で次のように述べている。

寒気がしたり、せきが出たりすると、ふつうわれわれはその症候をウイルスの活動の迷惑な副産物だと考える。しかし、いくつかの場合には、一人の寄主から別の寄主へ移りわたるための一助としてウイルスによって意図的に工作されたものである可能性のほうがずっと高そうに思える。単純に空気中に息から吐き出されることに満足せず、ウイルスはわれわれにクシャミやせきをさせて、ぱっと勢いよく吐き出させるのである。³⁶

つまり、ウイルスは、繁殖という利己的な目的のために、寄主にせきやクシャミをさせるのだという。では、ウイルスに感染した寄主側からみれば、せきやクシャミは迷惑な副産物でしかないのだろうか。

ドーキンスは、「風邪のウイルスの遺伝子と断片化した人間の染色体遺伝子は、お互いに自分たちの寄主がクシャミをするのを『望んでいる』点では一致する」³⁷と述べている。ウイルスに感染した体内の細胞が、せきやクシャミをすることを望んでいるということは、その細胞を内包する寄主にとっても、せきやクシャミは利己的な目的をもった現象だということができるのではないだろうか。

この指摘は興味深い。せきやクシャミという細胞にとっては利己的な現象が、個体レベルで考えると、ウイルスのためにクシャミをしてやるという観点に立てば利他的であり、ウイルスに感染した体内の細胞の望みであるという観点に立てば利己的なものとなるという、二面性を示している。

これは、人間が集合体的な要素をはらんだ存在であることと、無関係ではないだろう。村上是个の成り立ちについて、以下のように述べている。

細胞が集まって、より高度な秩序をもつ器官や臓器を形成する場合、細胞は、臓器に包み込まれながら、臓器の形成やはたらきに共同的に振る舞っています。しかし、細胞は、臓器に隷属しているのではなく、それ自身個性があり、臓器の中で自主的、選択的にはたらいしています。逆に臓器も、細胞自身の活動のため、共同してはたらいしています。このように、細胞（個）はたんなる個ではなく、全体に包まれており、臓器（全体）もたんなる全体ではなく、個の中にも生きているというように、個と全体の二つが一つになり、共同的に生きています³⁸。

細胞の集合である臓器、臓器の集合である個体、さらに個体の集合である人間という種、そして様々な種が集まって、地球は構成され、生命体として生きているということは、細胞も、臓器も、個体も、個でありながら全体でもあるということができないのではないだろうか。

それぞれがそれぞれの役割をにない、共同して全体を構成している。それが利己的な理由であれ利他的な理由であれ、個がきちんと役割を果たしていくことは、全体の調和につながっていくとすれば、社会のために生きるという利他の姿勢が、遺伝子のスイッチをONに切りかえ、個人の能力の可能性が広がることで、さらによりよい社会の実現に貢献するという、循環モデルが浮かび上がってくる。全体という大きな視点から見れば、利己と利他は対立するのではなく、共存するのだということができないのではないだろうか。だとすれば、人間は「持続可能な生活様式」に転換し得るということである。

8. 「偉大なる何者か」の存在

村上は、科学の進歩によって人類が獲得した合理性が、現代人の欠陥の一つであることを指摘している。

また、科学は実証主義を前提にしています。そのため、合理を超えるもの、目に見えないものを感じ取る力が衰えてしまっています。合理性はある段階までは大切ですが、この世の中は合理性だけではない。合理を超えるもの、目に見えないものが多いのです。³⁹

また、デュ・ヌイも『人間の運命』の中で、「むしろ合理的な思考をもてあそぶコツだけを身につけてしまった。」⁴⁰と述べている。科学の発達人間に、科学的に証明できないものは真実ではないという誤解を与えたということができないのではないだろうか。

村上は、遺伝子研究において、不思議な気持ちになったという。

これだけ精巧な生命の設計図を、いったいだれがどのようにして書いたのか。もし何の目的もなく自然にできあがったのだとしたら、これだけ意味のある情報にはなりえない。

まさに奇跡というしかなく、人間業をはるかに超えている。そうなると、どうしても人間を超えた存在を想定しないわけにはいかない。そういう存在を私は「偉大なる何者か」という意味で十年くらい前からサムシング・グレートと呼んできました。⁴¹

つまり、科学では実証できない存在を感じたということであろう。合理を超える存在が「偉大なる何者か」つまりサムシング・グレートと呼ばれる存在なのである。では、サムシング・グレートとは一体何者なのか、とうことについて、村上は以下のように述べている。

大自然の偉大な力ともいえますが、ある人は神様といい、別の人は仏様というかもしれません。どのように思われてもそれは自由です。ただ、私たちの大もとには何か不思議な力がはたらいていて私たちは生かされている、という気持ちを忘れてはいけません。⁴²

合理を超える存在、神とも言うべき存在を認めることの必要性については、デュ・ヌイも指摘するところである。「今日の偉大な科学者の大多数が信仰をもっている」⁴³ことを挙げ、真の科学者であるがゆえに信仰が必要であることを述べている。

また、ジェームズ・レッドフィールド著『聖なる予言』は、偶然の一致や神秘体験によって、魂の知恵を探って行くというフィクションであるが、その解説の中で、心理学者・河合隼雄も、以下のように語っている。

近代科学は、神秘的なもの、霊的なものを排除する。しかし、それは近代科学によっては存在を証明できなかっただけのことで、それを積極的にないということとはできないはずだ。

44

以上のように、現代は、かつては宗教的信仰と対極にあったとも言える科学においても、神と云うべき合理を超える存在を認めざるを得ない段階ということができているのではないだろうか。

しかし、神の存在を信じるか否定するかの判断は、人それぞれである。信仰を持つ人は、自らが信仰する対象である、神様や仏様の存在を信じているだろうが、信仰を持たない人は、合理を超えた神と云うべき存在を、信じることにはできないし、あるいは積極的に否定する場合もあるだろう。先述のように、合理を超えるもの、目に見えないものを感じ取る力が衰えてしまっているからであろう。

それでも、漠然とはあれ、「偉大なる何者か」の存在を認める人は多いのではないだろうか。

9. ニール・ドナルド・ウォルシュ著『神との対話』について

神の存在を信じていない人にとって、「神と対話する」という表現は、非常に抵抗があるのでないだろうか。また、「偉大なる何者か」の存在は認めるが、それを神と呼ぶことに抵抗を感

じている人にとっても同様であろう。

ニール・ドナルド・ウォルシュ著『神との対話』は、文字通り、著者と“神”との対話の記録である。書名に抵抗を感じて手にとらない人もいるだろう。しかし、ここに登場する“神”を、「偉大なる何者か」であるとしたり、著者の内なる声であると置き換えたりすることで、自分の感情と折り合いをつけ、読み進めることのできる人もいるだろう。この対話が、読む人の糧になればそれでよいのである。

『神との対話』では、さまざまなことが、“神”によって愛とやさしさとユーモアを持って語られる。まず“神”が語るのは、人生は、何かを学ぶためのものではなく、「自分が何者であるかを思い出すため、そして創りなおすため」⁴⁵のものだということだ。著者同様、これを読む多く人は、人生とは学校のようなもので、何かを学ぶために生きていると思って生きてきたであろう。ところが“神”は次のように言う。

(あなたがたの言う)人生とは、概念として知っていることを体験的に知る機会だ。何も学ぶ必要はない。すでに知っていることを思い出し、それにもとづいて行動すればいい⁴⁶

何故なら、「魂 あなたがたの魂 は、知る必要のあることはすべて知っている」⁴⁷からだという。何かを学ぶのではなく、既に知っていることを思い出し、自分が何者であるかを思い出す。そして在るべき自分になろうと努力し、自分を新たに創造していくのが、人生なのだと言。

在るべき自分とは、なんという偉大な概念だろう。在るべき自分を創造するというのは、なんという偉大な行為だろう。「自己についての偉大な概念を偉大な体験に変えたい、それが魂の唯一の望みだ」⁴⁸と“神”は言う。「魂の使命は、わたしたちに偉大さを選ばせること、選ばなかった部分を非難せず、最善の自分を選ぶようにさせることだ」⁴⁹とも言う。自分を創造するために、魂は最善を選び、偉大さを選んでいくということであろう。

選択するということによって、人間は在るべき自分に導かれ、知ること、体験することという創造のプロセスを経て初めて、在るべき自分になることができるという“神”は、何者かで在ること自体が、最大の喜びなのだとも言う。

単純に「在る」ということは至福である。神の状態、自らを知り、体験したあとの状態だ。これこそ、神がはじめから求めていたものである。⁵⁰

こう在りたいと思う自分になれるということから、眠っている遺伝子をONにすることで人間の可能性はどんどん広がる、ということが思い出される。「あることをやろうという情熱と実行力があれば、どんなことも可能性はゼロではない。それを阻害するのは「もうダメだ」という気持ちだけ」⁵¹だと村上はいう。これは、「否定的な考えは頭から追い出さなさい。悲観主義を一掃しなさい。疑いを捨てなさい。不安を拒否しなさい。最初の創造的な考えをしっかりと

つかんで放さないように心を鍛えなさい」⁵²という“神”の言葉に通じるのではないだろうか。

10. 在るべき自分で在るという実体験

しかし、いくら『神との対話』を読み進めても、この対話は著者ウォルシュの体験であり、その体験を通して読者は、“神”の言葉を読んでいるに過ぎない。魂が選択するということを体感したい、在るべき自分になるということを実感してみたい、と誰もが熱望するのではないだろうか。

個人的な話になるが、ここで筆者の体験を紹介したい。“神”が以下のように問いかけてきたとき、在るべき自分で在るという実体験があったことに気づいたのである。

社会は、ある種の違反行為（その行為が何かは時代によって変わってくるが）を犯した者を罰するためには死刑も必要だ、と信じるようにしむけるだろう。権力機構として存続するために、社会はそんなお言葉を受け入れさせなければならない。

あなたはこうした主張が正しいと思うか？他者の言葉をあなたは受け入れるか？あなた自身はどう思うのか？⁵³

死刑囚の俳句を取り上げて、卒業論文を書いていた時、死刑制度についての賛否を自らに問い続けていた。卒業論文自体は、死刑制度の賛否を問うものではなかったが、死刑囚の俳句を取り上げる以上、避けて通ることはできなかった。個人の意思として賛否を決断したからといって、日本が死刑存置国である事実が変わることはない。しかし、これは筆者自身が、罪を許すことができる人間なのか、人間を信じることができるかどうか、筆者自身がどういう人間なのかを見極めることなのだ、自分に言い聞かせて、死刑という過酷な現実と向き合い続けた。

この問いの答えを出すことは大変つらくむずかしいことだったが、死刑問題を考え、自分で答えを見出すということが、とても大事なことなのだという確信があった。死刑問題を考えるということは、自分がどういう人間なのかという問いかけについての、視点の一つに過ぎない。しかし、死刑賛否の答えを出した時、否、答えの方向性が見え始めた頃から、今までとは違う自分に生まれ変わっていくように感じていた。

自分がどういう人間なのかということがわかりかけてきたときの興奮をどう表現すればいいだろう。新しい自分に生まれ変わっていくように感じるという、今まで経験したことのない体験に高揚し、思考がどんどん冴えわたり、研ぎ澄まされていくように感じられた。自分の中に自由が広がっていくようだった。それはまさに至福であった。

死刑問題について考え続けた日々の様子をまるで見ていたかのように、“神”は以下のように語った。

...こういう疑問に目を向けてごらん。そうすれば、自分で考えなければならなくなる。自分で考えるのはつらいことだ。価値判断をするのはむずかしい。自分で考え、価値判断をするとき、あなたは純粋な創造の場に置かれる。なぜなら、さまざまなことについて「わたしにはわからない。わからないのだ」と言うほかないだろうから。それでも、決定しなければならぬ。選択しなければならぬ。自分で考えて選択しなければならぬ。そういう選択 過去の知識に頼らない決断 それが純粋な創造と呼ばれるものである。そしてひとは、そうした決定をしているとき、自分自身を新たに創り出していることに気づく。

54

あの頃体験していたことこそが、自分を創造するということだったのだろう。新しい自分に生まれ変わっていくような感覚は、自分自身を新たに創り出している状態の感覚だったのだ。

死刑問題を考え始めたころは、本当にわからなかった。何をよりどころにして、判断しているのかもわからなかった。わかっていたのは、ただ、世間の風潮や感情に流されてはいけないということだった。自分自身の問題として、罪を犯した人間を許せるのか、彼らが更生することを信じることができるのか、人間という存在を信じることができるのか、考え続けるしかなかった。それが如何に厳しい問いかけかは、実際にやってみればわかる。自分がどのような人間か、自分が何者なのかという問いかけにほかならないのだから。

しかし、いくら厳しくともこれをやめるという選択肢はなかった。“神”は、「その理由はばかばかしいほど簡単だ。『ほかにはどうしようもないから』」⁵⁵と言っている。まさにその通りだった。自分が何者であるのかを知るには、これを乗り越えるしかない、わかっていた。

この体験が、“神”のいう、自分自身を新たに創り出していくことだと気づいたとき、さまざまな“神”のことばが、現実感をもって迫ってきた。

だから、闇のなかの光になりなさい。そして、闇のなかにいることを呪ってはいけない。

また、まわりが自分と違うものばかりでも、自分が何者であるかを忘れてはいけない。

そして創造物をほめたたえなさい。たとえ、それを変えたいと思っても。

最も大きな試練が、最も偉大な勝利になる可能性がある。あなたが生み出す体験は、自分が何者であるか、そして何者になりたいかという宣言なのだから。⁵⁶

自分自身を新たに創り出していくという実体験を持つ人は、信仰の有無や“神”と言う存在を否定するかどうかにかかわらず、この力強く感動的な一節を、真摯な気持ちで受け入れるのではないだろうか。自分が何者であるかを模索し、創造していくことは、自分の命が光り輝くことであるといえる。闇があるから光がある。闇の中にいるからこそ、光が見え、自分の進むべき道が見える。試練があるから喜びがある。模索する者を、“神”は暖かく見守り、祝福してくれているといえるのではないだろうか。

11. 生きるということは選択するということ

『神との対話』は、個人的なことがらにとどまらず、社会・世界の在り方、宇宙という存在について、どんどん広がっていく。読者が、自分自身の問題を、社会や宇宙にまで広げて模索し、やがて、社会の在るべき姿、宇宙の真実を見出すとき、どのような至福が訪れるのだろうか。“神”は、次のように語る。

あなたは求めるものを手に入れられないし、欲するものを得ることもできない。求めるといのは、自分にはないと言いきることであり、欲すると言えば、まさにそのこと 欲すること を現実に体験することになる。⁵⁷

つまり、「至福を味わいたい」と思うだけでは、「至福を味わいたい自分」にしかねない。「至福を味わう自分」になりたければ、そのプロセスを選択しなければならないということである。“神”は何度も繰り返して、「人生で何かを経験したければ、それを『欲しい』とおもってはいけない。それを選びなさい」⁵⁸と言う。人生とは選択していくことであり、在るべき自己を実現するために、最善を選び、偉大さを選んでいくことだといえよう。

考えてみれば、人生はあらゆる選択によって構成されている。学校を選ぶ、仕事を選ぶ、住まいを選ぶ、衣服を選ぶ、食事を選ぶ。大小さまざまな選択によって、自分というものは形作られている。当然、生活様式を選ぶ、という選択もある。「持続可能な生活様式」を選ぶかどうか、ということがその人を「在るべき自己」に近づけもし、遠ざけもするといえるのではないだろうか。

人間にとって、自己の欲求を抑えて、社会や地球のためという利他的な目的のために「持続可能な生活様式」を選ぶことは難しいと考えがちだが、利他と利己は循環し、共存する概念であることから、可能であることを述べてきた。しかし、在るべき自己で在るということによって至福を味わうことができるのなら、利己的な動機のために、「持続可能な生活様式」を選ぶといえるのではないだろうか。

生きることは、選択することだ。そして在るべき自己になることで、幸せになることができる。“神”は著者・ウォルシュに次のように語る。

息子よ、あなたはこの人生ではメッセンジャー、先触れだ。知らせを伝える者、真実を求め、たびたび真実を語る者だ。ひとつの生涯では、それで充分だ。幸せに思いなさい。⁵⁹

メッセンジャーとしての在るべき自己を見出したウォルシュは、この“神”の言葉の通り、対話を記録し、出版して、世界中に知らしめた。このことは、世界の人々の幸せのためという利他的な動機だけでなく、在るべき自己で在るという利己的な動機に基づくものであるといえるだろう。

この著書を読んだ人々が在るべき自分の実現を目指し始めれば、必ずや、今の自分を取り巻く、社会や地球の問題について考えなければならない時がくるだろう。なぜなら、人間は集合的な要素を持った存在であり、社会の中でそれぞれがそれぞれの役割をにない、共同して暮らす存在だからである。地球の危機的状況は、他人事ではなく、自分自身の問題だということに気づいている人々は、これまで通りの「持続不可能な生活様式」を捨て、「持続可能な生活様式」を選ぶことができるだろう。このような人々が増えれば、地球が危機的状況を脱する一助になるのではないだろうか。

12. 終わりに

「偉大なる何者か」について語ることは難しい。神についてはなおさらである。それにも関わらず、『神との対話』を取り上げたのは、神を信じる人にとってはもちろんのこと、否定する人にとっても、生きていくこと、幸せになることについての、様々な知恵にあふれているからだ。

筆者も、科学の進歩の恩恵を受けて育ち、何事も合理的に割り切って考える癖を身につけ、合理を超える、目に見えないものを感じ取る力が衰えてしまった現代人の一人だ。ただ、科学で証明されていないからといって否定するというほどに、盲目的に科学の力を信奉しているわけでもなく、ただ漠然と、我々の世界や宇宙を包み込むような大いなる力は存在するかもしれない、あるいはその力とは、自分の内側にあるのかもしれない、と考えていた。

村上が書いた『生命の暗号』『生命の暗号』『サムシング・グレート』『遺伝子オンで生きる』などを通して遺伝子の世界を知るにつけ、大いなる力の存在、大自然の不思議な力によって生かされていることを、素直に認めていような気持ちの変化があった。それでも、「神」という言葉には、やはり人格化されたイメージがついてまわり、どうしても抵抗があった。

しかし、『神との対話』を読み出すと、そんなこだわりはつまらないことに思われた。『神との対話』の中の“神”は、神を信じることのできない者を否定しないからだ。この対話が、読む人の糧になればいいのである。

地球の未来を考える場合、今の状況を脱するためにどのような生活様式を選択すればよいか、ということ考察するだけでは足りない。それが実現するということがはるかに難問だからだ。どうすれば生活様式を変えることができるのか、どうすれば価値観をかえることができるのか、ということを考えるうちに、そもそも人間が便利さを捨てて不便さに回帰できるのか、という疑問が起こった。そこに遺伝子や神を持ち出すことは、本来ふさわしくないことなのかもしれない。しかし、これからの人間の進化や未来について考えるとき、「心」と「物」のバランス、精神と科学の関係について、考える必要があるだろうと考え、神と遺伝子（精神と科学）が、21世紀にふさわしい生活様式を実現する可能性について、どのような示唆を与えるかについて考察を試みた次第である。

-
- 1 伊東俊太郎著 『比較文明』 東京大学出版会 2002年 p.14
 - 2 同上 p.19
 - 3 同上 p.19
 - 4 ルコント・デュ・ヌイ著 渡部昇一訳 『人間の運命』 三笠書房 1994年 p.359
 - 5 同上 p.194
 - 6 同上 p.207
 - 7 佐野寛著 『21世紀的生活』 株式会社三五館 1997年 p.21
 - 8 同上 p.34
 - 9 同上 p.36
 - 10 同上 p.36
 - 11 同上 p.37
 - 12 同上 p.1
 - 13 同上 p.132
 - 14 同上 p.256
 - 15 高橋英之著 『偉大なる衰退』 株式会社三五館 2000年 p.264
 - 16 『21世紀的生活』 p.263
 - 17 同上 p.256
 - 18 『偉大なる衰退』 pp.264-265
 - 19 『21世紀的生活』 p.123
 - 20 同上 p.263
 - 21 同上 pp.264-269
 - 22 株式会社竹尾編 原研哉+日本デザインセンター原デザイン研究所企画/構成
『RE DESIGN 日常の21世紀』 朝日新聞社 2004年 p.9
 - 23 同上 pp.12-17
 - 24 同上 pp.158-163
 - 25 同上 p.119
 - 26 『21世紀的生活』 p.129
 - 27 村上和雄著 『生命の暗号2』 サンマーク出版 2001年 p.33
 - 28 村上和雄著 『生命の暗号』 サンマーク出版 2004年 pp.72-73
 - 29 『生命の暗号2』 pp.33-34
 - 30 同上 p.34
 - 31 同上 pp.77-78
 - 32 同上 p.100
 - 33 同上 p.124
 - 34 同上 p.139
 - 35 同上 p.71
 - 36 リチャード・ドーキンス著 日高敏隆、岸由二、羽田節子、垂水雄二訳
『利己的な遺伝子』 紀伊国屋書店 1997年 p.395
 - 37 同上 p.396
 - 38 『生命の暗号2』 p.139-140
 - 39 『生命の暗号』 p.61
 - 40 『人間の運命』 p.35
 - 41 『生命の暗号』 p.198
 - 42 同上 p.200
 - 43 『人間の運命』 p.320

-
- 44 ジェームズ・レッドフィールド著 山川紘矢 + 山川亜希子訳 『聖なる予言』 角川書店
2002年 p.407
- 45 ニール・ドナルド・ウォルシュ著 吉田利子訳 『神との対話』 サンマーク出版
2004年 p.47
- 46 同上 p.48
- 47 同上 p.48
- 48 同上 p.49
- 49 同上 p.144
- 50 同上 p.61
- 51 『生命の暗号』 p.151
- 52 『神との対話』 p.158
- 53 同上 p.262
- 54 同上 p.263
- 55 同上 p.265
- 56 同上 p.67
- 57 同上 p.32
- 58 同上 p.309
- 59 同上 p.316

【参考文献】

- 伊東俊太郎著 『比較文明』 東京大学出版会 2002年
- 佐野寛著 『21世紀的生活』 株式会社三五館 1997年
- 高橋英之著 『偉大なる衰退』 株式会社三五館 2000年
- 株式会社竹尾編 原研哉 + 日本デザインセンター原デザイン研究所企画 / 構成
『RE DESIGN 日常の21世紀』 朝日新聞社 2004年
- 村上和雄著 『生命の暗号』 サンマーク出版 1997年
- 村上和雄著 『生命の暗号2』 サンマーク出版 2001年
- 村上和雄著 『サムシング・グレート』 サンマーク出版 2004年
- 村上和雄著 『遺伝子オンで生きる』 サンマーク出版 2004年
- リチャード・ドーキンス著 日高敏隆、岸由二、羽田節子、垂水雄二訳 『利己的な遺伝子』
紀伊国屋書店 1997年
(Richard Dawkins, *The Selfish Gene New Edition*, 1989)
- ルコント・デュ・ヌイ著 渡部昇一訳 『人間の運命』 三笠書房 1994年
(Lecomte du Noüy, *Human Destiny*, 1947)
- ジェームズ・レッドフィールド著 山川紘矢 + 山川亜希子訳 『聖なる予言』 角川書店 2002年
(James Redfield, *The Celestine Prophecy*, 1993)
- ニール・ドナルド・ウォルシュ著 吉田利子訳 『神との対話』 サンマーク出版 1997年
(Neale Donald Walsch, *Conversations with God*, 1995)
- ニール・ドナルド・ウォルシュ著 吉田利子訳 『神との対話』 サンマーク出版 1998年
(Neale Donald Walsch, *Conversations with God book2*, 1997)
- ニール・ドナルド・ウォルシュ著 吉田利子訳 『神との対話』 サンマーク出版 1999年
(Neale Donald Walsch, *Conversations with God book3*, 1998)